広島大学高等教育研究開発センター

コリーグ

編集・発行　広島大学高等教育研究開発センター
〒739-8512　東広島市鏡山 1-2-2
TEL 082-424-6240　FAX 082-422-7104
URL: http://rihe.hiroshima-u.ac.jp

２００８年４月

「コリーグ」41号　目次

巻頭言（１～２）　大学教授職（Changing Academic Profession［CAP］）に関する国際会議の報告（３～４）　第35回研究員集会から（４）　高等教育公開セミナー報告（５）
New Generation Seminar（NGS）報告（５）　特別研究報告（６）
2007年度の公開研究会（７）センター往来（８）新任者・離任者から一言（９～15）
センター滞在記（15～18）　情報調査室だより（18）

巻　頭　言

教育熱心さを支えるインフラの整備を

吉田　　文（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

「自分の研究に力を注いで，学生の教育は手抜き…」国際社会のなかで日本の大学教員を形容してきた悪名高きフレーズである。その状況がやや改善されたことが，先日，広島大学高等教育開発センターが主催する国際会議で報告された。それによれば，研究を重視する教員は依然として多いが，1992年の調査と比較して教育を重視する教員は増加したというものであった。日本の大学教員が教育に目をむけるようになったのは，1990年代からの各種の教育制度改革の効果のあらわれかもしれないし，大学進学率の上昇にともなう学生層の変容への対応策とみることもできる。

大学は何よりも教育機関であるから，教員が教育に力を入れることは望ましいことである。教育熱心な教員は，どのような状況で生まれてくるのか，もう少し考えてみることにした。幸い，私の手元にも4,400人強の４年制大学の教員のデータがある。そこでも，自分の仕事の比重は研究にあるか，教育にあるかを二者択一でたずねている。それへの回答は，教育51.9％，研究48.1％とほぼ互角である。先の報告よりも教育派教員が多いが，それはサンプルのとり方の違いなのでここでは問題にしない。

両派の教員の意識の違いは，教員の役割や大学教育のあり方に明瞭にみることができる。教育派教員は，「大学教育は学生全体の底上げが重要」とする者が多く，研究派教員は，「優れた学生を伸ばすことが重要」と考える者が多い。また，教育派教員は，「大学教員は教授法に秀でることが重要」と考える者が多く，研究派教員は「専門分野に精通することが重要」と考える者が多い。優れた学生を伸ばすためには，自分の専門分野を極めて，研究に傾注することが必要である。他方，学生全体の学力の底上げをはかるためには，大学での勉学に興味関心をもたせる授業の技を磨かねばならない。仕事の比重を教育に置くのはもっともである。こうした教育観の違いが，教育と研究という仕事に対する力のかけ方の違いとなってあらわれているのだろう。

この教育観は個々の教員の信念かもしれないが，教員の置かれた環境によって

No. 41

醸成される部分は否定できない。教育観に影響を与える外在的要因として考えられるものの１つが，眼前にいる学生であり，もう１つが，職場の労働条件である。学生の学力レベルは，教員の対応に影響を及ぼすだろう。そこで，勤務している大学の学生の学力が全国レベルではどのあたりに位置づくのか，５段階で評価をしてもらった。その各グループに，教育派教員と研究派教員のどちらが多いかをみると，学生の学力を１（最低）としているグループでは60％が教育派教員である。学力評価が上がるごとに教育派教員は少なくなり，学生の学力を５（最高）とするグループでは，教育派教員は30％にとどまる。手のかかる学生が多いと，教育熱心になるようだ。学力の底上げを重視するのは，そうした学生が多いことによるのかもしれない。

ところで，学生の学力分布がどの大学や学部でも均等ではないことを考えれば，教育派教員や研究派教員も，大学や学部によって多寡があることが想定される。ある程度予想されるように，教育派教員は，国立よりも私立に多く，専門が理系の教員よりは文系の教員に多い。この設置者と教員の専門は輻湊して，教育か研究かという教員の仕事観に影響している。たとえば，私立の教育学系の教員は80％が教育派教員であることを自認しているが，国立の工学系教員では，教育派教員は30％に満たない。工学系のみならず，国立の理系の教員は押しなべて研究派教員が多い。平均すれば，教育派教員と研究派教員とはほぼ半々であるが，教育熱心な教員は，特定の大学や学部に偏在しているのである。

なぜ，こうしたことが生じているのだろう。それを解く鍵の１つが労働条件である。たとえば，授業負担について，半期の担当授業コマ数をみると，国立の工学系では，担当コマ数が３コマまでの教員が65％を占めていることに，まず驚く。次いで，４～６コマが26％，７コマ以上が９％となっている。他方で，私立の教育系は，３コマまでが10％，４～６コマが48％，７コマ以上が42％と，授業負担の違いはきわめて大きい。もちろん，これは学部の授業担当コマ数をきいているため，大学院担当を含めると国立工学系が，もう少し増えるだろう。しかし，工学系は，一般的に教養教育の担当が少ない傾向がある。そうだとすると，国立の工学系教員は，高度な専門や研究に近い内容を授業とすることができる可能性が高いということができる。その対極にあるのが，私立の文系というわけである。教養教育はもちろん，学部の専門教育，さらには大学院まで幅広く担当せねばならない。

授業負担の違いがあっても，TA などの配置があればそれをカバーすることがきる。しかし，それについても国立と私立の環境の違いは大きい。国立工学系では，90％の教員が TA は整備されていると回答しているが，私立の教育系では，その比率は46％と半数に満たない。授業負担が多いところでは TA の整備が十分ではなく，授業負担が少ないところでよく整備されている。大学院生の多寡や大学経営の状況を考えれば，私立の文系は TA など望めないのだろうか。

これらの労働条件の違いは，学生の学力問題を考慮するとさらに過酷になる。学生と労働条件という２つの外在的要因は，実は密接に関連する要因であったのだ。学生の学力を１としているグループでは，７コマ以上を担当している教員が45％と半数近くいる。学力水準があがるにつれて担当コマ数は少なくなり，学生の学力を５としているグループにおいて，７コマ以上を担当している比率は22％まで低下する。また，TA の整備状況についても同様で，学力が５のグループでは，教員の82％が整備されていると回答しているが，学力１になると整備されているとするのは43％である。学生の学力が低いところほど授業の担当コマ数が多く，TA が十分に配備されていない，というわけである。

手のかかる学生を抱えている教員ほど，授業負担も重ければそれをカバーする手立てもない。否が応でも，教育をせざるを得ない。教育熱心というよりは，教育以外のことができないといったほうがよいかもしれない。教育派教員とは，実はこうした状況に置かれていることを，調査データはあぶりだしてくれる。今のはやり言葉でいえば，大学教員間の「格差」がここにある。そしてこの格差を助長しているのが，近年の教育政策ではないだろうか。教育派教員が，学生全体の底上げが重要だ，教授法に秀でることが重要だという信念をもっていたとしても，それを工夫するための時間や資金はどこからかくるのだろうか。授業負担の軽減や TA の整備など，お金でもって解決できる可能性は高い。しかし，教育という地味な日常の積み重ねに対して，評価にもとづく競争的資金でもって手当てしようとしたとき，悪条件のところになかなか資金は配分されない。必要なところに資金が回らないという，悪循環が起きていなければよいと思うのは杞憂だろうか。日本の大学教員も教育熱心になったと，手放しでは喜べない現実があることを，もっと直視する必要があるように思う。

大学教授職（Changing Academic Profession [CAP]）に関する国際会議の報告

黄　福涛

2008年１月28－29日にかけて，広島大学高等教育研究開発センター，文部科学省科学研究費補助金「21世紀型アカデミック・プロフェッション構築の国際比較研究」（研究代表者：有本　章［広島大学名誉教授，現 比治山大学高等教育研究所長］）主催，比治山大学高等教育研究所共催により，アジア・太平洋地域，欧州，北米，南米の計15ヵ国・地域* から研究者を招聘し，「変容する大学教授職―国際比較および実証的視点から―」（The Changing Academic Profession in the International Comparative and Quantitative Perspecitves）と題し，第３回目となるCAP国際会議を開催した。出席者は，国内外から招聘した研究者，一般参加者（海外からの一般参加者12名），当センター教員および大学院生を含め，約100名を数えた。

現在，アジア・太平洋，アフリカ，欧州，北米，南米の計22カ国・地域が，「変容する大学教授職（CAP）」に関する国際プロジェクトに参加している。うち，18カ国・地域では既にアンケート調査を終了，もしくは進行中であり，今後，ニュージーランドや韓国も同様の調査を行う予定である。

本会議では，カーネギー教育振興財団が1992～1993年に手がけた国際調査の現代版に基づいた各国・地域の調査結果により，特に大学教授職の教育歴・職歴，職務の状況と活動，教育，研究，管理運営，および家庭的・個人的背景といった６つの側面に焦点を当てた。具体的には，１）各国及び地域における過去数年間の大学教授職の変化を解明し，21世紀初頭の関連諸国における大学教授職の変化の実態および背景・要因を検討すること，２）これにより，大学教授職の世界的な変化を捉えること，そして３）最近の日本における大学教授職の変化と問題点を取り上げ，今後の改革に対して一定の知見・方策を引き出すこと，の３点を目的とした。

以上を踏まえ，会議はアメリカおよび日本双方の研究代表者による基調講演の後，各国の研究代表者がアンケート調査に基づいた発表，質疑応答を行うという形式で進められた。その中で，参加国における過去数年間の教授職の変容に関して，いくつかの共通点および相違点がみられた。まず，主な共通点として次の６点が挙げられよう。

１．高学歴，特に博士号を有する教員比率の増加
２．教員に対する任期制や契約制実施の増加
３．仕事に対する教員の高い満足度
４．複雑な行政過程やトップダウン型の管理運営に対する教員の認識
５．研究面における教員，特に若手教員の精神的重圧
６．女性教員比率の増加（特にアメリカ，イギリスおよびメキシコ）

他方，主な相違点は以下の２点であった。

１．日本，メキシコ，アメリカ，およびドイツ（特に教授を除く教員）における教員の興味が主に教育であるのに対し，アルゼンチンやドイツにおける教員（特に教授）のそれは主に研究であること。さらに興味深いのは，イギリスの教員の興味は双方にあること。
２．教員の国際化について，過去と比較すると，カナダ，オーストラリア，およびブラジルにおける教員の国際化はさらに進んでいるのに対し，アメリカ，イギリス，中国における教員の国際化はそれ程ではないこと。

また，会議では今後の共同研究の推進方法や，３つの課題について活発な議論がなされた。すなわち，１）いかにして教授職に関するキーワードや専門用語に対する共通理解が得られるか，２）各国におい

＊参加国は中国，中国香港，日本，マレーシア，オーストラリア，イギリス，フィンランド，ドイツ，イタリア，ポルトガル，アメリカ，カナダ，アルゼンチン，ブラジル，メキシコの計15ヵ国・地域であった。

て教授職に共通変化をもたらした主要要因をいかに解明するか，３）いかにして国際的データベースを構築するか，またいかにして真の国際比較および実証的な研究を行っていくか，である。参加国のうち多くの国々において，まだ十分にデータ分析がなされておらず，特に国際比較的な視点からみた大学教授職の変容に関する分析は，今後の重要な課題の一つであろう。

以上のように，本会議では参加国における教授職の変容に関する共通点および相違点が明確となり，上記の課題を中心に活発な議論が行われた。また国内外の参加者の間での情報共有，研究成果の交流を深めることができ，大変有意義な会議であったといえよう。

第35回研究員集会から

今回は,「知識基盤社会における高等教育システムの新たな展開」なるテーマにて11月16－17日に渡って開催した。例年どおり，冒頭部に続いて，基調講演，報告会およびその討論という３つのセッションに分かれている。

１日目の冒頭部では，浅原新学長がご挨拶をされ，続いて，山本眞一高等教育研究開発センター長がオリエンテーションと本集会の趣旨説明をされた。

セッション１は，IDE 大学協会中国・四国支部共催によるもので，２名の講演があった。
東京大学先端科学技術研究センター教授澤昭裕氏が,「知識基盤社会における高等教育（研究）システムの新たな展開－先端研の試みを例として－」と題する講演をされた。戦後の大学改革概観を皮切りに，知識基盤社会の構築に向けた産学連携の在り方や人材育成の現状と問題点を指摘され，先端研における産学連携の実践例を紹介された。そして，マクロ構造，大学単体および教員の各レベルでの政策提言があった。

続いて，比治山大学高等教育研究所長・教授有本章氏が,「知識創造発信型の高等教育」と題する講演をされた。知識の機能や大学における学問的生産性，研究と教育の統合の問題を指摘された。高等教育におけるアメリカモデルは一つのカタチであり，今後の日本型高等教育に関する４つのモデルをアメリカを視野に入れつつ，①完全同化，②疑似同化，③採長補短，④完全非同化，のパターンがあることが示された。

セッション２は，２日目午前に開催され，知識基盤社会と大学・大学院：グローバル社会における知識・組織・経済と題し，３名の報告者が登壇された。最初に山本センター長による簡単な趣旨説明があり, 続いて, NPO21世紀構想研究会の東京理科大学教授馬場錬成氏が「知識社会論・科学論の観点」から，国立教育政策研究所の高等教育研究部長塚原修一氏が「人材養成・組織編成の観点」から，そして大阪大学大学院教授松繁寿和氏が「経済・社会の観点」から報告された。馬場氏からは，第三次産業革命としての今日，小泉内閣の知財立国政策，知識社会の特性とそれに必要な学問につづいて,「科学文化学」創造の提案があった。塚原氏からは，高等教育における収益率，産業界と大学等との役割分担と大学におけるエジソン型研究の必要性について指摘があった。また，人材養成に関し，国内外の大学の連携が重要であるとの指摘もあった。松繁氏からは，大学院教育の不足として，意思決定にかかわる人材養成や政策分析の専門家養成の問題，大学院修了者に対する処遇のプレミアム，文系学部教育のあり方などについての問題提起があった。

２日目午後には，午前の報告に対する討論がなされた。国立大学財務・経営センター名誉教授の市川昭午氏によるコメントがあった。日本の科学技術立国性，科学技術的促進とい観点からの大学の役割などの観点を提示され，それに引き続き討論がなされた。一時，社会科学における日本の業績に対する外国認知の問題がクローズアップされ，英語力の必要性なども話題に挙がった。

（文責：北垣郁雄）

高等教育公開セミナー報告

平成19年度高等教育公開セミナー
「高等教育の質的保証と学生」

主として大学教職員向けに例年開催している高等教育公開セミナーを，平成19年度は８月20日（月）から21日（火）にかけてセンター内で開催した。今回は前年度に引き続いて学生に焦点を当て，「高等教育の質的保証と学生」と題して，センター教員６名によって講義を行った。セミナーへの参加申込者は定員（30名）の半数強の17名に留まったが，地元の中国地方はもとより，関東，東海，近畿からの参加もあり，幅広い地域から参加者を募ることができたのは例年通りであった。

セミナーの内容は以下の通りである。今回は講師の数が少なかったため，各講義時間に90分を確保することが出来た。

講義１　大場　淳　高等教育の質保証と学生の参加～欧州の経験から
講義２　山本眞一　高等教育の質保証と大学の役割・機能
講義３　大膳　司　18歳人口減少時代における高等教育機関の運営－日米を対象として－
講義４　北垣郁雄　大学授業の工夫
講義５　黄 福 涛　高等教育の質保証と外部評価
講義６　小方直幸　学生生活と学生支援

講義後のアンケート（匿名）では，講義の時間が適切であるといった意見が目立った。例年，センター全教員担当を原則とした上でセミナーを二日間で終わらせることとしているため，各講義の時間が短くなりがちであったが，今回は講義数は少なくなった半面，比較的十分な時間を各講義に取ることが可能となった。その他の意見の中では，一部で採用された参加型の講義の評価が高かったこと，職員においても実践的な講義よりは学術的な講義を期待する向きがあること，講義の順序に整合性が欠けるといった指摘が目に付いた。最後に紹介した意見については，センター教員の都合に合わせて講義時間を割り振っている現状もあるので全面的に対応するのは困難であるが，寄せられた諸々の意見を考慮しつつ，本セミナーをより魅力あるものにしていきたい。

（文責：大場　淳）

New Generation Seminar (NGS) 報告

イースト・ウェスト・センターの
セミナー訪問団の受入れ

山本　眞一

平成19年10月21日から24日にかけて，高等教育研究開発センター（RIHE）では，米国ハワイにあるイースト・ウェスト・センター（EWC）が主催する「次世代人材セミナー」（New Generation Seminar）の訪問団を受け入れた。このセミナーは，米国および環太平洋諸国から今後の活躍が期待できる若手人材を招聘し，設定された課題について情報や意見を交換することによって理解を深めようとするもので，1988年に始められ18回目になる今回の課題は「21世紀の教育課題」というものであった。セミナーはハワイで１週間，日本（広島）と中国（上海）での研修に１週間というスケジュールで，米国から４名，

その他の国から12名の合計16名の参加者を得て行われた。ちなみに，EWC は環太平洋地域に関わるさまざまな研究活動を通じて米国と関係国の相互理解を深めるために，1960年，米国議会によって設立された機関である。

RIHE では EWC 側からの要請を受けて，このセミナーの実施に全面的に協力することにし，広島での二日間にわたる研修プログラムを設定した。初日の10月22日は，午前中広島大学でわが国の教育課題についての説明をセンター長と大場准教授から行い，また活発な質疑応答が交わされた。午後は地元の学校訪問として，東広島市立三ツ城小学校と広島県立中・高等学校を訪れ，施設や授業の様子を見るなどして，それぞれの学校から暖かい歓迎を受けた。また，夕方には広島大学で歓迎のレセプションが行われた。

二日目の23日は，午前中，広島県教育委員会を訪問し，榎田教育長および伊藤教育次長から県の教育行政に関する説明を受け，また午後からは広島市立平和資料館を訪れ，原爆資料館を見学するとともに，市側から平和資料館の概要および平和活動に関する説明を受けた。また，被爆体験者からの話を聞く機会を市側から提供いただき，松島圭次郎氏から英語による講和を聞き，参加者に深い感銘を与えた。

このセミナーの参加者の多くは，30歳代の研究者，行政官，議会関係者など将来を嘱望される人材であり，わずか二日間の日程ではあったが，広島という場所でわが国の教育について語り合い，また21世紀の教育の在り方について意見交換ができたことには大きな意義があったものと考える。この行事の諸準備にあたった EWC，広島県，東広島市および RIHE の関係者に感謝を申し上げる次第である。

特別研究報告

山本　眞一

平成18年度および19年度の２ヵ年にわたって文部科学省から受託した調査研究「競争的な教育資金の効果の検証及び今後の在り方に関する調査研究」がこのほど終了し，その成果が刊行された。この調査研究は，文部科学省が行ってきた各種の大学教育改革の支援の充実プログラム（以下「大学教育改革プログラム（GP)」という）の中で，とくに「特色ある大学教育支援プログラム」（特色 GP）および「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代 GP）が高等教育の質の向上に果たしたこれまでの成果の検証と，これに基づく今後の教育改革プログラムへの取組のあり方に関する検討を行うため，高等教育研究開発センター（RIHE）においてアンケート調査，訪問調査等さまざまな方法で調査と分析を行ったものである。

その結果，(1) 大学教育改革プログラム（GP）に対する評価は非常に高いこと，(2) 学長は教育システムの改善，担当者は教育基盤整備の充実に関心があり，また委員は GP そのものの実施とその効果を注視していること，(3) 取組が選定された学校とそうでない学校そして申請しない学校との間では，意識に差異があること，(4) GP の全体的な効果は認められるが，具体的な効果が及ぶにはこれからの課題であること，(5) 支援期間終了後の継続が課題であること，を明らかにした。

以上の分析結果に基づき，政策提言として，(1) 大学教育改革プログラムの継続を図ること，(2) よりきめ細かな事業運営を行うこと，(3) 各大学・短期大学により幅広い参加を促すこと，をとりまとめた。

研究成果は報告書として印刷製本し，委託元の文部科学省に届けたが，その成果の一部は今年２月，横浜で開催された GP 合同フォーラムにおいても紹介し，その周知を図ったところである。また，平成20年度から文部科学省では，これまでの特色 GP などの経験を踏まえつつ，「質の高い大学教育推進プログラム」という形で新たな支援を決めており，この政策決定に我々の研究成果が活かされたものと確信している。

2007年度の公開研究会

＊肩書は当時（敬称略）

	講　　師	テ　ー　マ
第１回 (2007/4/26)	ゲーリー・ローズ（アリゾナ州立大学高等教育研究センター長・教授）	大学資本主義と新経済
第２回 (5/8)	張　斌賢（北京師範大学教育学院院長･教授） ［通訳：姜　星海（北京師範大学教育学院講師］	中国高等教育改革の趨勢と課題
第３回 (5/15)	ジェーン・ナイト（トロント大学教育研究センター adjunct 教授，高等教育研究開発センター外国人研究員）	高等教育の国際化：利益とリスクとの均衡
第４回 (5/22)	Sharon Hamilton（インディアナ大学）	アウトカムズ，Ｅポートフォリオ，アセスメント
第５回 (6/4)	Hugo Horta（リスボン工科大学）	学問的生産性の決定要因と教育・研究結合：カーネギー区分と学問的生産
第６回 (10/22)	山本　眞一（高等教育研究開発センター長） 大場　淳（高等教育研究開発センター准教授）	21 世紀の教育課題：アジア・太平洋諸国の共通課題を探る
第７回 (12/17)	カール･ノイマン（ドイツ･ブラウンシュヴァイク工科大学・大学教授学センター長）	大学における教育文化から学習文化：大学教授学と大学改善のためのカリキュラム計画
第８回 (2008/1/16)	ユッシ・ヴァリマ（ユヴァスキュラ大学教育研究所高等教育部長・教授，高等教育研究開発センター外国人研究員）	知識社会論と高等教育のグローバル化
第９回 (1/31)	第１部：リチャード・ジェームス（メルボルン大学高等教育研究センター長・教授） 第２部：ユッシ・ヴァリマ（ユヴァスキュラ大学教育研究所高等教育部長・教授，高等教育研究開発センター外国人研究員）	第１部．学習・教育を向上させるための基金（LTPF）：そのパフォーマンスに基づいたメカニズム 第２部．ヨーロッパの高等教育におけるグローバル化の過程
第 10 回 (2/7)	ユッシ・ヴァリマ（ユヴァスキュラ大学教育研究所高等教育部長・教授，高等教育研究開発センター外国人研究員）	フィンランドの高等教育の社会的ダイナミクス
第 11 回 (2/12)	ユッシ・ヴァリマ（ユヴァスキュラ大学教育研究所高等教育部長・教授，高等教育研究開発センター外国人研究員）	北欧の高等教育政策における昨今の動向と話題
第 12 回 (3/24)	李　盛兵（中国華南師範大学国際文化学院長・教授）	高等教育機関における「中外合作弁学」（トランスナショナル教育）に関する人材育成モデルの研究
第 13 回 (3/27)	ティエリ・マラン（フランス国民教育研究行政名誉総監査官）	ボローニャ・プロセスとフランスにおける質保証

センター往来【2007年４月～2008年３月】

＊肩書きは当時（敬称略）

〈2007年〉

４月　Gary Rhoades（アリゾナ州立大学）

５月　張　斌賢・姜　星海（北京師範大学教育学院），Sharon Hamilton（インディアナ大学）

６月　Hugo Horta（リスボン工科大学）

７月　夏目　達也・中井　俊樹（名古屋大学），鈴木　敏之（文部科学省）

８月　全国大学教育研究センター等協議会メンバー，深津　弘（朝日新聞）

９月　なし

10月　中国国務院教育部研修参加者（計20名），小原　輝三（立命館大学），米 East-West Center (EWC) 主催 New Generation Seminar 参加者（計15名），Terance Bigalke（EWC），天野　郁夫（東京大学名誉教授）

11月　澤　昭裕（東京大学），有本　章（比治山大学），塚原　修一（国立教育政策研究所），山田　礼子（同志社大学），馬場　錬成（東京理科大学），松繁　寿和（大阪大学），市川　昭午（国立大学財務・経営センター名誉教授），志磨　慶子・鳥井　真木（立命館大学）

12月　Karl Neumann（ブラウンシュヴァイク工科大学），草飼　達治・北島　善介（日本学生支援機構），**「理系高学歴者のキャリア形成に関する実証的研究－高学歴無業者問題を考える－」研究会参加者**：［岩崎　久美子・山田　兼尚（国立教育政策研究所），坂東　昌子・鈴木　康之・岡田　葉子・谷口　正明（日本物理学会キャリア支援センター），下村　英雄（労働政策研究・研修機構）筒井　泉（高エネルギー加速器研究機構），別府　明子（品川介護福祉専門学校）］

〈2008年〉

１月　加藤　敬（文部科学省），Tran Khanh Duc（ベトナム国立大学），Richard James（メルボルン大学），**CAP 国際会議招聘者**：［Monica Marquina（国立ヘネラルサルミエント大学），V. Lynn Meek, Loe Goedegebuure（ニューイングランド大学），Hamish Coates（ACER），Elizabeth Balbachevsky（サンパウロ大学），Amy S. Metcalfe（ブリティッシュコロンビア大学），Hong Shen（華中科技大学），Gerard A. Postiglione（香港大学），閻　鳳橋（北京大学），Timo Aarrevaara（タンペレ大学），Ulrich Teichler, Oliver Bracht（カッセル大学），Michele Rostan（パリア大学），Morshidi Sirat，Muhamadbin Jantan（マレーシア科学大学），Jesus F. Galaz_Fontes，Jose Luis Arcos-Vega，Juan Jose Sevilla-Garcia（南ババカリフォルニア大学），Laura Padilla-Gonzalez，Mtra. Ma. de los Dolores Ramírez Gordillo（アグァスカリエンテ大学），Sergio Martinez Romo（メキシコメトロポリタン大学），Manuel Graça（CIPES），William D. Locke（オープンユニバーシティ），William K. Cummings（ジョージワシントン大学），Martin Finkelstein（シートンホール大学），Jung-cheol Shin（ソウル大学），有本　章（比治山大学），江原　武一（立命館大学），金子　元久（東京大学），吉田　文（メディア教育開発センター），山野井　敦徳（くらしき作陽大学），藤村　正司（新潟大学），浦田　広朗（名城大学）］

２月　なし

３月　李　盛兵（中国華南師範大学），Thierry Malan（フランス国民教育省），顧　明遠（北京師範大学）

新任者・離任者から一言

2008年度客員研究員

足立　　寛（あだち　ゆたか）
立教大学総長室調査役

このたびの就任については大変光栄なことと感謝しています。かつて私はベネッセコーポレーションに20年近く勤務し，主に入試分析や高校改革の仕事に関わってきました。その後，進研アドに出向・転籍し，大学改革の専門誌「between」の編集長としてさまざまな大学を取材してきました。立教大学の職員として転職したのは２年前のことです。現在，もっとも関心があるのは，募集広報，高大連携，キャリア教育，初年次教育等の分野における教職協働のあり方についてです。これらの分野について今後も多少の実践も交えたご報告や協力をさせていただける機会があれば幸いです。どうぞ宜しくお願いします。

石塚　公康（いしづか　きみやす）
読売新聞東京本社
読売ウイークリー編集部

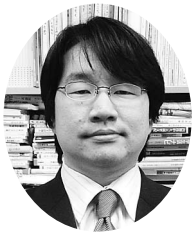
私がセンターの大学院で学んでいたころ，事務室のテレビで，新しい元号が平成に決まったことを知りました。ということは，あれからもう20年経ってしまったわけです。

最近は，髪の毛が薄くなり，当時すでにせり出し始めていた腹はさらに飛び出し，かつて好青年（？）だった面影は，微塵もありません。ならば，その後の記者生活で，少しは実践知を積めたかというと，こちらも全く自信がありません。

しかし，今回，思いかけず，このような機会をご提供いただいたことは，「高等教育の取材に携わってきた記者生活を振り返るチャンス」ととらえています。また，これまで考察してきたアカデミズムとジャーナリズムの関係などについて，さらに考えを深めてみたいと思います。そのことを通じて，「母校」に少しでもご恩返しができればと願っております。

小田切　宏之（おだぎり　ひろゆき）
一橋大学大学院経済学研究科教授

企業経済学・産業組織論・イノベーション経済学を専門としています。ここ数年はバイオテクノロジー・医薬品分野におけるイノベーションに焦点をあててきました（『バイオテクノロジーの経済学』，2006，東洋経済新報社）。この分野では基礎研究とイノベーションの関係が密接なだけに，大学における研究・教育のあり方に強い関心を持っています。また，イノベーションと経済発展の関係についての国際共同研究に係わってもいますので，キャッチアップのプロセスにおける大学の役割についての国際比較研究も必要と考えています。こうした視点を持ち込むことで当センターに少しでも貢献ができれば，何よりの幸いです。



白川　優治（しらかわ　ゆうじ）
千葉大学普遍教育センター助教

広島大学高等教育研究開発センターは，喜多村和之先生を恩師とする私にとって，特別な存在です。そのため，このたび客員研究員としてかかわらせていただけることは，大変ありがたいことであると同時に，緊張もしているところです。私はこれまで，戦後日本の奨学金制度・大学立地等の政策過程を中心に，高等教育の制度・政策の形成・変遷過程と現実の高等教育の変化の関係を歴史的に検証してきました。現在の高等教育の制度・政策の構造と機能のもつ意味と特徴を，その形成と変遷過程を明らかにすることを通じて，将来のあり方を考えていくことを目指しています。他にも，初年次教育・高等教育財政・学生のパネル調査・国立大学の法人化・大学教育センターの役割・IR などのテーマの共同研究にも取り組んできました。今後とも，高等教育を深く広く考えていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

末冨　　芳（すえとみ　かおり）
福岡教育大学学校教育講座准教授

このたびは客員研究員の末席に連ならせていただけること，恐縮であると同時に光栄に思っております。

教育大学の職務上，就学前教育～高等教育まですべての学校段階に関するプロジェクトにたずさわっておりますが，研究者としてもっとも楽しんで取り組んでおりますのが高等教育研究です。これまで高等教育の費用負担問題や，重要なスポンサーである保護者の教育費負担動機に関する研究，大学立地政策の研究，戦前学生文化研究，1970年代の学生文化変容に関する研究など，質量双方からいろいろとアプローチをしてまいりました。

みなさまとの交流の中で自らの研究を広げかつ深めていければと思うと同時に，教育者としてまた大学人としての識見や教養を高めることができればと思います。

杉谷　祐美子（すぎたに　ゆみこ）
青山学院大学文学部教育学科准教授

このたびは，伝統ある貴センターの客員研究員にお声を掛けていただき，誠にありがとうございました。私はこれまで，学士課程カリキュラムの編成，初年次教育プログラム，大学の教育効果・学生の学習成果に関する評価などについて研究してまいりました。最近は，自分が担当する授業を対象とした実践的研究にも取り組みはじめています。また学内では，FD，自己点検・評価など学科を越えた全学的な仕事にも携わってきました。今後は私立大学の学部・学科所属という立場を活かして，リアリティのある研究と教育活動を積み重ねていくことを目指しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

杉本　和弘（すぎもと　かずひろ）
大学評価・学位授与機構准教授

専門は比較教育学で，これまでオーストラリアを中心にオセアニアの高等教育政策や質保証について研究を進めてきました。現在の職場では，認証評価や法人評価の現場（そして裏側）を体験しつつ日本の大学評価のあるべき姿について考える毎日です。高等教育研究開発センターには３年前までCOE研究員としてお世話になり，高等教育研究について多くのことを学び経験させていただきました。今度は客員研究員としてさらに研究を深め，私なりに貢献できればと考えています。よろしくお願いいたします。

杉本　　均（すぎもと　ひとし）
京都大学大学院教育学研究科教授

本年度より客員研究員を拝命いたしました。専門はマレーシアを中心とした東南アジアの比較教育学的研究です。マラヤ大学留学時代より，高等教育が国境を越えて展開するダイナミックな状況に驚き，国別研究というよりは，国際間教育関係，グローバルな教育的インパクトに関心を持っています。特に近年の高等教育におけるトランスナショナル教育の展開は，これまでの留学の概念を根底から覆すような大きな変化を予感させるものであり，マレーシアも日本もその影響は免れないと思われます。この分野で最も長い歴史と優れた実績を誇る当センターのスタッフの皆様との意見の交換を楽しみにしています。

鈴木　敏之（すずき　としゆき）
文部科学省高等教育局高等教育企画課企画官

文部科学省の高等教育局では，大学設置認可に関わる部署を経て，現在，中央教育審議会の大学分科会の事務局を総括する任に就いております。仕事柄，高名な委員の先生方の御議論や，興味深い情報・データに接する機会に恵まれておりますが，理論や実証に裏付けられた政策の企画立案の大事さを痛感しつつ，一方で，その難しさに悩みつつ，日々を過ごしております。

「大学とは？」,「大学教員とは？」,「大学の自治，自律性とは？」等々，社会の各方面から，直接・間接に根源的な問いが突きつけられます。そのような中，高等教育の研究と行政の実務との協働が進む一助になればと願っています。

隅藏　康一（すみくら　こういち）
政策研究大学院大学政策研究科准教授

知的財産政策・科学技術政策の研究を行う中で，産学連携をめぐる政策，ならびに産学連携を担う人材の育成に関心を持ち，実践しています。大学院生，ポスドク，企業人，行政官などさまざまな人が知的財産や産学連携に触れる「入り口」を作ること，ならびに産学連携に携わる専門人材のネットワーキングの場を作ることを目指して，2000年に「知的財産マネジメント研究会（Society for Management of Intellectual Properties: Smips）」を立ち上げ，これまで８年間ですでに90回の研究会を実施しました。そのような観点から，高等教育研究について，センターの皆様と一緒に議論させていただけるのを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

濱中　淳子（はまなか　じゅんこ）
大学入試センター研究開発部助教

このたび，客員研究員を仰せつかりました。博士論文では大学院教育を扱いましたが，ここ数年は，高校生の進学行動，高等教育の経済的効果，大学入試，ポスドクの就職，社会人の育成問題など，多様な切り口から高等教育のあり方を考えるよう努めてまいりました。この機会に，皆様からたくさんの刺激を受けたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

2008年度学内研究員

江坂　宗春（えさか　むねはる）
大学院生物圏科学研究科教授

2008年度学内研究員を仰せつかりました。「断ることができない愚かな人間」と評されております。前副学長から，2006年度発足した大学院課程会議の議長に指名され，本学の大学院教育改革に携わってきました。地域では，小学校のPTA会長・学校評議員，東広島市PTA連合会の会長，高等学校のPTA副会長と，初等中等教育の現場も見させていただいています。最初は無駄だと思っていたことが，結構ためになっています。JABEEや教育GPの審査員も務めさせていただき，最近は，興味深い教育プログラムに出会うことを楽しみにしております。ただ，いろいろ苦労して作られたプログラムが本当に人材養成に資するかが問題です。しかし，「たとえ無駄になれども，努力は報われる」に違いありません。この４月から，生物圏科学研究科の研究科長を仰せつかり，本研究員の職務を全うできるか心配ですが，貴センターでいろいろなことを学びたく，どうぞよろしくお願いいたします。

佐藤　利行（さとう　としゆき）
大学院文学研究科教授

昨年，前広島大学長の牟田先生に勧められて日本高等教育学会に入会しました。夏には中国のウルムチにある新疆師範大学で開催された日中高等教育学会に参加しました。高等教育の現場で，今何が問題にされ，これからの高等教育がどのように進んで行くのかということを知る絶好の機会となりました。

私の専門は中国古典学です。また本学の北京研究センター長として中国には多くの人的ネットワークがあります。これらを活用して高等教育研究の上で皆様のお役に立ちたいと思っています。

どうぞ宜しくお願いいたします。

曽余田　浩史（そよだ　ひろふみ）
教育学研究科准教授

専門は教育経営学です。小・中・高等学校の学校評価やスクールリーダー教育（学校経営のための教育）などに取組んでいます。また，文部科学省学術調査官（2006.8～2008.7）として，学問の在り方，学問と社会・行政との関係などを考える機会を得ました。この経験を生かして研究員の任に当たりたいと思っています。よろしくお願いいたします。

2007年度教員

島　一則（しま　かずのり）
高等教育研究開発センター准教授

昨年(2007年)10月１日付でセンターに着任しました島一則です。これまで，大学進学の経済的効果や高等教育財政・財務について研究を進めてきました。今後は，左記と関連付けながら高等教育システムの諸機能の実態について研究を進め，そのインプット・アウトプット（アウトカム）の連関関係から，高等教育システムの構造について考えていきたいと思います。

東広島というめぐまれた自然環境，そして高等教育開発センターという恵まれた教育研究環境の中で，着実に努力を積み重ねていく所存です。「コリーグ」の皆様，センターともども，何卒よろしくお願いいたします。

2008年度教員

渡邉　聡(わたなべ　さとし)
高等教育研究開発センター准教授

平成20年４月１日付けで着任しました渡邉です。６年間勤務した前任校（筑波大学大学院ビジネス科学研究科）では，ミクロ経済学，労働経済学，計量経済学，人的資源管理などを担当し，英語開講による国際 MBA プログラム（専門職学位課程）の設立にも係わりました。大学学部から Ph.D. 取得まで米国（ユタ，カリフォルニア，ニューヨークなど）で過ごしたため，日本の高等教育を受けないまま日本の大学教員になった研究者ですが，今後はその視点をいかして，わが国の大学組織研究および計量経済学の応用分析をおこなっていきたいと考えています。今後ともよろしくお願いいたします。

福留　東土(ふくどめ　ひでと)
高等教育研究開発センター准教授

これまで約３年半の間，一橋大学大学教育研究開発センターの専任教員として，学士課程教育の運営や各種調査研究，評価に関係する仕事などいろいろなことを経験してきました。センターでは，これらの経験を自分の研究の中に活かしていきたいと考えています。大学院の授業では比較高等教育論を担当します。まずは，比較そして歴史の視点から，これまで取り組んできたアメリカ高等教育の研究を自分の中でじっくりと捉え直すことから始めたいと考えています。院生の皆さんと一緒に学び合えるのを楽しみにしています。私は大学院生，研究員としてすでに７年間センターに在籍してきましたが，若輩者ゆえよく分かっていないことも多々ございます。皆様に教えていただきながら，自分の役割を見出していけたらと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

2008年度研究員

渡部　芳栄(わたなべ　よしえい)

平成20年４月より，広島大学高等教育研究開発センターでお世話になることになりました。正確には平成19年度後半より委託事業のお手伝いをさせていただいていて，何度か東広島に足を運んでおりました。自然豊かな場所だなと感じる一方で，その中でも先生方・院生の皆様方の研究に対するパワフルさには驚きました。

これまでは学校法人の経営や私学助成について研究をしてきましたが，今後は，センターの素晴らしい研究環境の中で新しいテーマを発見し，取り組んでいきたいと思います。東北の地でのゆったりとした研究スタイルから，高教研スタイルに変えていかねばなと感じております。ご指導のほど，よろしくお願いいたします。

2008年度研究支援員

荒木　裕子（あらき　ひろこ）

平成20年４月１日より，研究支援員として勤務させて頂くことになりました。広島大学では，平成18，19年度の２年間，国際協力研究科21世紀 COE プログラム「社会的環境管理能力の形成と国際協力拠点」

の研究支援員として，主に研究会・セミナー・シンポジウム等の開催に係る事務的業務，プログラムの刊行物に関する業務，ホームページ管理等を行っていました。高等教育については門外漢なので，業務を通じて少しずつ勉強したいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

瀬分　智子（せわけ　ともこ）

平成20年４月１日より採用して頂くことになりました瀬分と申します。今まで，工学研究科の方で，秘書をしていましたが，縁あって，こちらで採用して頂けることになり，また違った仕事に就く機会を与えられ大変うれしく思っています。

最初のうちは，不慣れな点が多くご迷惑をおかけすると思いますが，１日でも早く，研究支援員として皆様のお役に立てるよう頑張りますので，よろしくお願い致します。

2007年度離任者

Professor Jane Knight

外国人研究員（2007年４－６月）

My stay at RIHE have been full of information, insight and inspiration about the complex world of higher education in Japan. It has been a privilege to interact with the professors, research associates and students at RIHE and Hiroshima University. This centre houses a wealth of information and expertise on higher education in Japan and the region and I deeply appreciate the invitation to be a visiting professor. I am committed to continuing my research to better understand the internationalization process in Japanese higher education. The study of the future scenarios of 'Big Japan' and Little Japan' are fascinating and I am particularly interested in the role that the international dimension of the higher education sector will play.

I look forward to continuing my research collaboration with colleagues from RIHE. I hope that our paths will cross often.

Professor Keith Morgan

外国人研究員（2007年９－12月）

So, spring has arrived - magnolias in flower on the campus, Sakura blossom hurrying to catch up before the arrival of April. And all the activity and change that spring inevitably invokes.

The urge to migrate does not merely infect the birds. Offices all around are full of cardboard boxes, either coming or going. And of course there are farewells and greetings.

For me, the seasonal pattern is firmly established. Whether it is a migratory urge or a now familiar routine, it is time to go - first to Australia, then to England, always just too late to see the daffodils.

The Centre is itself generating new growth and developments: new graduate students, new professors, new staff and new projects. Will all the new boxes fit into the rooms; will the new postdocs have the proper tennis credentials?

I have enjoyed the privilege of being a member of RIHE for long enough that the future looks good - and that when I see it again it will be both good and different. The measure of the Centre's academic success is evident internationally as well as by the supposed quantitative performance indicators. But its even greater success is in the warmth of its environment. Even those of us who leave find opportunity to return - some, like me, with the flow of the seasons.

This year one central member of the family, Satomi Ito, will leave. She is now as well known to our colleagues overseas as in Japan. She has been one of the key members of so much of my work. The Centre will probably survive - but we shall all miss her, even as we celebrate her new status as Mrs Sawada.

伊藤　さと美（いとう　さとみ）
研究支援員

2002年12月からCOE研究支援員として約４年半，更にCOE終了後は研究支援員として１年間，センターでお世話になりました。

在職中，様々な業務に携わらせていただきましたが，自身の未熟さを痛感することの連続でした。今日まで無事に勤務できましたのも，多角的な視野に立ちご指導いただいた教員の皆様を始め，高い専門性を持ち，力強くサポートして下さった職員の皆様のお陰と感謝しております。この場をお借りして，お礼を申し上げます。

コリーグの皆様，センター教職員，大学院生の皆様のご健康とご活躍をお祈りしております。

本当にありがとうございました。

修　了　生

景山　愛子（かげやま　あいこ）
博士課程前期修了（2008年３月）

あっという間の２年間でした。RIHEの先生方と先輩，同級生には大変お世話になり，お陰様で実りの多い時間を過ごすことができました。別分野から進学したため，新しく知ることが多く，自分の勉強不足も痛感した２年間でもありました。今後もこれまでの課題と新しく得るものに対して，積極的に研究が行えるよう努めて参りたいと考えております。皆様，今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。また，これまでの温かいご理解とご指導に心から御礼申し上げます。

立石　慎治（たていし　しんじ）
博士課程前期修了（2008年３月）

この２年間はとても充実していました。入学した年はCOEの最終年度ということもあり，張り詰めた緊張感の中で研究されている先生方の背中を拝見しつつ，のびのびと研究させていただいたことを思い出します。２年目に入って論文の足音が聞こえだすと忙しくなり，外部の研究グループで学ばせて頂いたりしたことや調査のお願いにかけまわったことがしみじみと思い出されます。

思い返せば，あっという間でした。楽しいことはすぐ終わるということなのでしょうか。必死で日々の課題をこなしていたら，いつの間にか時間が過ぎ去っていたということなのでしょうか。今となっては，どちらもそれなりに真だという気がします。

来年度もセンターで学ぶことになりましたので，この２年以上に充実したものにしたいと思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。

平岡　君啓（ひらおか　きみたか）
博士課程前期修了（2008年３月）

大学職員として勤務する中で，大学運営に関する疑問や問題意識がつのり，いっそ高等教育研究の立場から，大学をとりまく環境を見てみようという大きな思いを抱いて，入学しました。とは言っても，学士号は法学（ゼミは行政学）の私が，教職課程で教育社会学の履修経験はあるものの，この研究分野は素人ということもあり，研究や論文構想に，戸惑いがあったのも事実です（今もかも知れませんが）。

この２年間，積極的にセンター内外の研究会や学会に参加することを心掛け，生きた情報・最先端の研究成果を得ることができました。中でも，改正教育基本法で，初めて条文化された「第７条　大学」について，伊吹文部科学大臣（当時）に直接所見を伺えたことも，良い思い出です。

多くの方々の助言を頂きながら，修了を迎えることができました。この場をお借りして，御礼申しあげます。そして，今後ともよろしくお願いいたします。

新　入　生

清水　栄子（しみず　えいこ）
博士課程後期

入学してからの１年は本当にあっという間に過ぎ去ろうとしている。仕事と研究の両立は予

想を遙かに超えて大変だが，私の生活は充実感であふれている。職場の理解を得て通った授業，その他の場面での先生方や院生の皆さんとの高等教育に関する議論は，何ともいえない緊張感と充実感を与えてくれるのだ。豊富な資料と先生方のご指導，事務スタッフの皆さんの温かいサポートのおかげで業務等に幅が出てきたと感じている。現状に満足することなく，また，苦しみから逃げることなく，自分なりの枠組みを見つけ出し，さらに深みが増す研究ができるよう，達成感が味わえるよう，日々頑張っていきたい。

センター滞在記

Captain's logbook: Day 45

Professor Jussi Välimaa

When we landed on the shores of this beautiful Island, everything was new to us. We could neither speak nor understand the language, we could not find a place to eat or to sleep. All we knew was to try to reach our distant destination, Hiroshima University. To our great relief, however, the pilot we had contacted before our arrival -Mrs. Masayo Daikoku- was already there, waiting for our arrival in a peaceful bay of civilization, Higashi-Hiroshima railway station. It is hard to imagine how any academic captain, or a crew member, would survive the first difficult days on a strange island without the caring hand of a pilot like Mrs. Daikoku and all the friendly people in the office of the Research Institute for Higher Education.

It was also a nice surprise that the local academic tribe had reserved a special cabin for the captain of this academic expedition. In that visiting professor's room there was everything one needed to have to concentrate on reading and writing and thinking. Quite soon it also turned out that when somebody knocks the door the right answer is doozoo -in the local language. It means that 'I have been too shy to keep my door open, but please enter: I have been waiting for you.' The other two most important magical words in this new culture are arigatoo and sumimasen. These words help a visitor in every possible situation -perhaps because of the difficulty to translate them into English or Finnish? According to our ethnographic observations these concepts may mean: thank you for your attention! Sorry to bother you. Please, sign this. Yes, that is ok. No, it is not normal to do that. Goodbye! May I enter the room? As you can see the local inhabitants are very able in using minimum numbers of words to express maximum numbers of meanings. All you have to do is to pick the right one.

Little by little the secrets of this mysterious island have begun to be revealed to our crew. We have learned where to find food. Friendly tribe members in the neighbouring rooms at the Research Institute have shown safe routes to university restaurants. We are especially grateful to chiefs Oba and Shima and their families who have showed hospitality beyond normal friendliness.

We have also learned that the best way to get a free meal is to have a seminar. So, we decided to have several seminars. That was a good strategy also because it enabled us to see members of other academic tribes dwelling in the universities of Kumamoto and Tokyo. Also participating in

Academic conferences serves the same purpose. Especially useful was the Changing Academic Profession-Conference, which was hosted and organized by the supreme chief Yamamoto and his excellent crew. They really deserve to be mentioned in the book of those who have mastered and conquered new frontiers!

We were also struck by the fact that there are some academic children on this small world of Research Institute. These novices are called post-graduate students, and they live in a room in the institute. Normally, however, it is difficult to catch a sight of them because they are studying all the time. The only exception to this rule was the Nabe Party which they organized to celebrate the Captain of this academic expedition. We were terrified because we were not certain whether we would be the main ingredient in the dish called Nabe, or is the Nabe itself the main dish? To our great pleasure, the latter was the case. It also turned out that many senior members of the Research Institute participated in the Nabe party. This showed us something very unique among all academic tribes we have visited so far: a companionship between students, professors and their families. In that night we had a strong feeling that this trip was worth of everything we had looked for.

However, what would academic crew members do during the many lonely nights in a strange country. Yes, what would we do without a good library? Nothing, I would like to say. It is an extraordinary pleasure for an academic traveler to find so many nice and quiet companions to talk with. I mean of course books. They follow you everywhere and they let you think. However, these quiet companions would be lying uselessly in their bookselves without the exceptionally capable staff of the library. They give you the right answer even before you have asked it!

Our journeys on this island have not yet reached even the mid point. However, there is full reason to assume that this academic expedition -which I have chosen to tell as an allegory taken from the captain's logbook- will reach a good end. I am also quite sure this storytelling would have been supported by my crew members, in other words all those higher education scholars whose ideas I am carrying with me (Burton Clark, Tony Becher, Maurice Kogan) when trying to understand new academic cultures. This kind of storytelling also tries to communicate that it is utterly important for a foreigner -or a visiting professor- to have the feeling that he is welcome and that he is taken care of by friendly people. Practical matters are important. Without these feelings it would be hard to see why I am already thinking about my next possible visit to the Research Institute for Higher Education. When saying this I am fully aware of the excellent infrastructure this research institute has to offer for any higher education scholar.

（ヴァリマ先生は，2008年１月から４月まで広島大学外国人研究員としてセンターに赴任されました。）

閻　飛龍　（エン　ヒリュウ）
アモイ大学教育研究院博士課程２年
広島大学高等教育研究開発センター研究生（2007年10月入学）

ずっと思っているのは広島大学，特に広島大学高等教育研究開発センターと縁があることである。2006年10月にセンターで行われた国際シンポジウムに，アモイ大学教育研究院の潘懋元教授と一緒に参加させていただいた。その時，黄福涛教授（今本人の指導教員）のご案内で初めて広島大学と出会った。「美しい自然環境に恵まれている素晴らしい高等教育研究機関で，いつかこのような雰囲気の中で研究させていただければいいなあ」と感じた。2007年，

中国の国家教育部は「国家建設高水平大学公派研究生項目」という政策を打ち出した。そのチャンスを捉まえて，願望を実現することが出来た。あっという間にセンターでの残りの研究期間は半年になってしまった。この間にセンターの皆様には大変お世話になっており，特に先生方の温かいご指導，職員の方の笑顔，院生の皆さんのご親切を一生忘れないと思う。また，センターで習得した知識，貴重な経験を今後の研究の舞台で生かせるようにと思っている。

2006年３月に東京学芸大学大学院教育学研究科で修士課程を修了した。同年の９月にアモイ大学教育研究院の博士課程に入学して，今年で二年目になっている。修士課程では，平野先生のご指導の下でカリキュラムに関する研究をしていた。現在も変わらず，カリキュラムに関心を持っている。今回の高等教育カリキュラムについての研究は，初中等教育カリキュラムを中心とした研究と比べて，ずっと難しく感じている。その異なる点は，高等教育と社会との関係がより緊密で，近い関係にあり，学問ももっと深いことにあるかもしれない。しかし，初中等教育カリキュラムと，高等教育カリキュラムには，当然異なる部分が事実として存在しているけれども，根本的に共通するところがあると思っている。この場を借りて，カリキュラムに関する基本的なものを，定義と基礎理論との二つの視点から小論させていただきたい。

まず，カリキュラムの定義についてみれば，大変多様であると言えよう。研究者によって社会，知識，教育，学校，学習者に対する各観点から，さまざまに定義がなされている。高等教育のカリキュラムも国によって，名称が多様である。その内包と外延も違っている。カリキュラム名称の多元化は高等教育の多様な発展の結果である。カリキュラムを分析するにあたって，定義された表面から理解しようとすると，一定しておらず，カリキュラムの「質」全体を理解することができない。各カリキュラムには，歴史的，社会的背景，認知の基礎，結果重視か過程重視かの違い，文脈的問題という四つの要素が潜在的に存在している。ここで，文脈的問題について少し展開していきたいと思う。カリキュラムの定義の文脈的問題について，実は異なるカリキュラムの定義がある時，それらは異なる層における役割を果たしている。言及されるカリキュラムは常に違った意味でのカリキュラムである。一般にカリキュラムには企画，設計から実施まで，決策者，編成者から教師，学生まで，いくつかの連続した層がある。あるカリキュラムの定義はある層よりも上に注目したカリキュラムである。したがって，定義づけた人の基本観念を示しているといえる。カリキュラムは異なる層にわたって存在しているので，我々は必ず全体的に見なければならない。

次に，カリキュラムの基礎理論という視野から，カリキュラムの基礎はカリキュラムの目標・内容・実施・評価などが影響している基本的領域である。カリキュラムの基礎を探究することは，実際，カリキュラムの知識の外部限界とそれにもっとも関係の深い情報源を確定することである。では，どの領域がカリキュラムの基礎であるのか。研究者によってさまざまな主張がある。例えば，アメリカの研究者，D・and L・Tanner と J・Saylor は一つの有効なカリキュラムの基礎が社会，学生，知識であるとしている。イギリスの研究者の D・L・Smith とオーストラリア学者の D・Lawton はカリキュラムの基礎理論が心理学，社会学，哲学であると主張している。台湾の研究者の黄炳煌はカリキュラムの理論の基礎は心理学，社会学，哲学である，とその知識の構成を指摘した。現在，心理学，社会学と哲学がカリキュラムの基礎あるいは基礎理論であると認められている。心理学については，学校教育の主な機能の一つが学習者の個人発達を促進することに由来する。したがって，カリキュラムに関する研究者は，必ず個人の発達と学び過程との本質を知らなければならない。学習者の特徴を無視してカリキュラムを編成すると，教育にとってマイナスの影響を引き起こしてしまう。心理学は学校カリキュラムに対して重要な意味を持っている。心理学の原理と研究の成果が，常に重要なカリキュラムに関する研究の根拠にされる。心理学には流派が多くあり，今まで一つの心理学理論で統一されたことはない。各流派の合理的なものだけを吸収し，それを高等教育のカリキュラムの心理学的基礎とする。社会学については，高等教育のカリキュラムが社会の政治，経済，文化などの因子に制約されることに基づくものである。同時にカリキュラム自身の機能で社会の発展に影響をもたらす。高等教育のカリキュラムがもつ社会環境

との相互作用はカリキュラム研究者に重視される。社会の背景を離れての高等教育のカリキュラム論争は暗然とし，色を失っている。社会学は特に高等教育カリキュラムにとって重要な基礎である。哲学については，学校カリキュラムとその実践は心理学，社会学と哲学の基礎を欠かすことができないが，その中でも，哲学は基礎の基礎と言われている。哲学はカリキュラムと実践の根拠だけでなく，心理学と社会学の土台ともなっている。いかなる学校カリキュラムもその設計者の哲学の思想と観念を含んでいる。高等教育のカリキュラムも同様にその研究者の哲学思想を含んでいる。

情報調査室だより

情報調査室（資料室）は，日本はもちろん世界的にみても屈指の高等教育関連資料を所蔵する専門図書室です。所蔵資料は10万点以上，年間受入資料数は少なくとも3000点あります。収集しなければならない資料は年々増える一方，古い資料については，世界中探してもここにしかないものが多数あり，おいそれと手放すこともできません。

夏休みなどに，他大学の院生や先生方が資料室を利用された際「どこを探してもなかった資料があった」とおっしゃると密かに心の中で「ガッツポーズ！！」。「よし，もっと充実した資料室に」というモチベーションも上がります。

貴重な資料を多く所蔵していることは，ひとえに歴代のスタッフをはじめ，いろいろな方が資料室のことをとても大切にして下さっているおかげだと思っています。各資料は，初めての方にも利用し易いように，なるべく同系統の資料を一箇所に配架するよう心がけています。

しかし，資料は増えることはあっても減ることはなく，物理的な配架スペースが限られていることから，これまでの収集方針を貫くのもだんだんと難しくなっています。どこの大学図書館でも悩みのタネの配架スペース問題。ここも例外でなく，根本的な解決策を見出すことができないまま，現在に至っています。何かこのスペース問題を解決する妙案がある方は，ぜひセンター資料室にご一報下さい。

－資料紹介－

2007年夏，倉庫の整理をしていると，大学関連特集の古い雑誌がまとまって出てきました。この資料群について現在，検索できるよう書誌データを作成中です。

１部検索できるようになっておりますので，ぜひお時間のあるときにでもセンター web をごらんください。結構おもしろいタイトルのものもあります。

http://bunken.rihe.hiroshima-u.ac.jp/（文献情報総合検索）

（手順）（オプション設定）資料種別を選択→雑誌記事（不定期入荷分）にチェックをいれてください。